



モンゴルとの 交流事業

中央区とモンゴル・ウランバートル市バヤンゴル地区との間で、平成11年度から子供交流事業を行っています。

これは、21世紀の主役として広い視野を持ち、それを地域に生かせる人材の育成を目的とした事業です。次代を担う子供たちが、他国の文化を知り、相互理解を深めることで、豊かな国際感覚を養っています。

なお、12年度からは、「中央区バヤンゴル地区子ども交流委員会」によって事業が行われており、中央区からは補助を行っています。



昨年、モンゴルから札幌を訪れた、10～17歳の8人の子供たち

また、中央区の印象については、「さつぼろ夏まつりや雪まつりなど、イベントが多く開催されていると思います。そのほかに、文化・芸術・歴

史の施設が多いです。中でも娘がピアノや絵画を習っているため、K⁺itar⁺a⁺や市民ギヤ⁺リーなどによく行きます」とナランゲレルさんは話します。

モンゴルとの習慣の違いについて、「モンゴルではたとえ家族であってもほかの人と同じ湯船に入る習慣がないため、最初は、銭湯や温泉には戸惑いました。しかし、今では娘と一緒に風呂に入って、ス

キンシップを取っています」と話すナランゲレルさん。すっかり日本の習慣になじんでいます。



ナランゲレル・ブッデギアさん

モンゴルとの交流事業で通訳を担当。
モンゴル・ウランバートル市出身

今年度の中央区とモンゴルの子供交流事業で通訳を務めたナランゲレルさんは、夫のガンゾリグ・スミヤさんが、北海道大学の大学院で寄生虫の研究することになったため、平成五年に家族全員で札幌にきました。家庭では二男一女のお母さんでもあります。



日本の伝統的遊び、お手玉を体験

日本はいろいろと便利なものを売っているため、ギョーザやうどんのめんなど、モンゴルにいた時は自分で作っていた物を、店で買うようになったそうです。しかし、ナランゲレルさんは、「やらなくなったこと以上に、新しく始めるようになったことのほうが多いですね」と笑顔で話します。

「夫の研究に区切りがつき、モンゴルに帰るまでに、日本の物をいろいろ食べたいです。特にモンゴルには海がないため、海の幸を存分に味わって帰りたいです」と語るナラン

ゲレルさん。

現在、中央区で行っているモンゴルとの交流事業についての感想を、次のように話します。「子供のころからいろいろな国の人と交流することはとてもいいことです。モンゴルのことわざに『千回聞くより、一回見る』というのがあります。まさにその通りだと思います。この事業をきっかけに、大人の交流も広がってほしいとナランゲレルさんは望んでいます。

モンゴルとの友好の橋渡し役として、今後も活躍が期待されます。



啓明中学校での歓迎式で通訳を務めるナランゲレルさん。みんなに分かりやすい、丁寧な言葉で通訳をしました